

東京都選手団の戦い

文責 強化委員長 小林 隆雄

今年の南関東大会は、6月14日から17日まで埼玉県熊谷市スポーツ文化公園陸上競技場で行われた。大分インターハイ出場へ、東京都選手団の健闘ぶりを皆様にご報告致します。

今年の関東大会では2つの東京都高校新記録が誕生した。女子七種競技において伊藤 明子（田園調布学園3）が自身の持つ記録を更新し5177点を獲得し大会新で優勝を果たした。また、女子400mHでも伊藤が59秒14をマークし都記録を更新した。両種目とも自身の持つ記録を更新しての優勝は快挙であり、いずれもインターハイでの活躍が楽しみである。

今大会の結果、東京都からは男子が4種目に優勝し延べ27種目と1チーム、女子は9種目に優勝し延べ31種目と4チームが大分インターハイへの出場を決めた。

特に投擲種目では男女7種目中6種目に優勝したほか、1年生の活躍も目覚ましく全国上位にランクされる好記録が多く誕生した活躍であった。

男子

・短距離

100m・200mとも3位に入賞したルーキー大嶋 健太（東京）の活躍が目覚ましかった。100m準決勝でマークした10秒48は高1歴代2位に相当し、200m決勝での21秒36も高1歴代6位に当たる。いずれも桐生 祥秀（京都・洛南）の1年生記録を上回った。インターハイでも十分上位に入賞できる可能性は高く、国体と合わせて活躍してもらいたい選手である。また、林 謙太郎（八王子3）・内田 貴一（暁星3）の上級生も自己ベストでインターハイへの切符を手に入れた。特に内田は同タイム着差なしで6位が二人となり、南関東からは100mで7名がインターハイに出場することとなった。

400mでは都大会優勝の坪 祐貴（八王子3）がケガで欠場したのは残念であった。勝ち抜く力が十分あっただけに今後の回復を願う次第である。

・中長距離

800mではここ最近東京都のレベルが高く、今年も4名が決勝に進出した。その決勝では千葉県勢に上位を独占されたがレース巧者の3年生の戸澤 文也（城西）織田 修平（保善）が終盤まで良く粘り5位・6位に滑り込んだ。都大会優勝の手塚 光貴（日大豊山2）はわずかに及ばず7位と悔しさをにじませた。

ハイペースで展開された1500mでは岡田 健（久我山2）が終始集団に配置し、鋭いラストの走りで先頭にあとわずかに迫る3分52秒29の好記録をものにした。岡田は7月の世界ユースにも選出された。

5000mでは茂木 圭次郎（拓大一3）がスタートから先頭で引っ張り積極的にレースを展開した。中盤以降も集団から遅れることなく自分の走りを終始貫き6位でゴールした。この種目に絞った結果であろう。

3000m障害では東京都選手が6名とも決勝に残る健闘を見せた。走力に優る中山 将（東京実業3）高橋 叶（久我山3）が順当に2位・4位でゴールを駆け抜けた。また、1年生ながら遠藤 宏夢（久我山）が終盤の粘りから抜け出し6位を死守した健闘は大いに称えたい。

・ハードル

110mHでは東京高校の3年生二人の坂本 景・前田 洋志が準決勝を勝ち抜き決勝へ進んだが、本来のハードリングができず7位・8位に沈んだ。前田は初の14秒台もマークし好調であったが、今年はレベルが多く上位に食い込むことは出来なかった。

400mHでは、都大会優勝の向井 頌之（開成3）が自己記録を大きく更新する52秒42で3位に入った。今年になりスプリントが向上、本来のハードリングが生きた結果と思われる。51秒台も視野に入れたインターハイが楽しみである。5位には坂本 景（東京3）がこれも自身初の52秒台でインターハイ出場を決めた。

・競歩

優勝候補であった山口 壱平（東京実業3）は終始安定した歩型から21分45秒67で2位とした。自己記録からは大きく及ばなかったが安全に全国出場を優先した感があった。熱いインターハイのレースにも対応できる気力・体力は備えているので全国大会での最上位を期待したい。

・リレー

400mRでは予選で東京高校が40秒77の全国的好記録をマークして唯一決勝に駒を進めた。しかし、決勝では1・2走間でのバトンパスに失敗しインターハイ出場はならなかった。41秒3台でなければ全国に進めない現状が今の南関東のレベルである。

1600mRでは、八王子と日大豊山が決勝に進出した。エースの坪をケガで欠いても入賞に至った八王子高校はさすがに昨年の全国準優勝チームである。全国ではエース復活で再度頂点を目指してほしい。日大豊山も終始善戦していたがわずかに遅れたすきを埋めることができず7位とした。また、城西も予選で善戦していたが、他校と接触がありバトン落としてしまい決勝に進むことは出来なかった事は残念であった。

・跳躍

走高跳は1m95で6位となる例年通りの展開であったが、これを1回目でクリアできた蘇 優介（都立立新田3）が5位となり全国行きを決めた。2回目であった横戸 寛之（堀越3）は7位と涙をのんだ。いつでも2mを跳べる選手でなければ全国に行けないと再確認した次第である。

棒高跳も4m50が境界線となった例年通りの結果であった。それを越えた田代 丈（東京2）が3回目であったため6位には至らなかった。上位を独占した神奈川勢は練習会を毎週末行い強化を図り結果を出した。

走幅跳では実力者である内川 佳祐（東京3）が終始安定して7m10以上を跳躍し、7m20の記録で2位とした。全て向い風での跳躍となったのが悔やまれるが助走・踏切が安定してきただけに今後に期待したい。また、3位とした金子 諒（都練馬工2）は1回目に唯一の7m15をマークし全国選手となった。潜在能力が高いだけに経験を積むことで今後大いなる飛躍が期待できそうな選手である。

三段跳は今年レベルが高く、神奈川県勢の15m選手がその実力を見せつけた。その中、14m49の6位でトップ8を迎えた井関 慶人（東京2）は4回目に14m91を跳び15mに迫ったが5位であった。

・投擲

砲丸投では優勝候補の安藤 夢（東京2）が終始15m台の安定した投擲を見せ、最終的には15m72の自己ベストにまで記録を伸ばし危なげなく優勝した。16m台が全国上位となるだけに更なる記録アップを期待したい。ウエルネスの石井 光一（3）が14m28の自己ベストで全国切符を手に入れた。

円盤投も優勝に近かった安藤が2投目に大会新記録をマークし47m84で2冠に輝いた。同じ東京高校の栗城 湧介（3）は1投目に42m30を投げ優位に試合を進めることができ5位に入賞した。

ハンマー投では、都大会優勝の戸山 和紀（顕明館3）が自身初の50m台をマークし50m17で4位となった。雨で滑るサークルながらよくぞ自己ベストをマークしたと感じた。6位となった石垣 俊典（保善3）は50mこそ越えることは出来なかったが安定して49m台を3回マークし父子2代の全国行きを決めた。

やり投げでは、開始早々の1回目に62m19の大ベストをマークした山田 舜（東京成徳2）が逃げ切りの優勝を果たした。朝一番の1投目に集中した立派な投擲であった。

・混成競技

八種競技では浅澤 豊（都駒場3）が全種目に安定した記録をマークし5411点の自己ベストで優勝を果たした。特に砲丸では13m05の自己記録を投げるなど良く集中した結果と言える。雨と猛暑の中でコンディション作りに苦労したと思うが良く健闘した。全国大会でも更なる記録更新で入賞が見えてこよう。

村山 航大（東海大高輪台3）も苦手な投擲では苦労していたが、得意なスプリントで得点を稼ぎ4位とした。

・総合

昨年優勝した東京は、リレーでの失敗などが響き首位に10点以上届かず3位とした。

女子

・短距離

昨年のインターハイで100・200mの2種目に入賞している、東京都のエースである高森 真帆（東京3）は100mのレースで故障し以後のレースを棄権した。100mではぎりぎり6位に踏みとどまり全国出場の権利は得たので完治しインターハイの頂点を目指してほしい。代わって優勝したのは荒井 アンバー（日工大駒場2）である。決勝では向い風0.5mの中、自身初となる11秒台をマークした。荒井は今季好調で支部予選から都大会と高森と互角の走りを見せ、今回自己記録を大きく更新してきた。全国大会でも大いに期待できる。また、3位には1年生のエドバー イヨバ（東京）が健闘した。

200mでは高森不在が響いたが、高島 紗矢子（都狛江3）が予選を8番目ではあったものの決勝に駒を進め、その決勝では100分の1の争いを制し自己新記録で6位に滑り込んだ。終盤の粘りの走りは見事であった。

400mでは小林 茉由（八王子2）香坂 さゆり（白梅学園3）北村 夢（東京3）が予選で56秒台をマークし好調を呈して決勝進出を果たした。決勝では小林・香坂が55秒台の競り合いから優勝争いを展開し僅差ながら小林が先着した。北村も56秒06で都大会から1秒以上記録を更新しての快走であった。今年レベルの高い女子400mであるがインターハイでの決勝進出も大いに期待できる。

・中長距離

800mでは東京都大会でのハイレベルを証明することができたレースであった。決勝進出8名のうち東京都選手6名全員が占めた。決勝ではト部 蘭（白梅学園3）北村 夢がレースを積極的に展開したが、終盤伸びてきた奥田 静香（東京2）が2分10秒25で先着した。北村が2着、鈴木 菜沙（白梅学園2）が同じく2分10秒台で3着に入った。城西の松尾 咲子（2）5着、ト部6着となり5名がインターハイ出場を決めた。いずれも全国ラインキング上位となった事から全国入賞者が複数出る可能性が出てきただけに大いに期待したい。

1500mは南関東の強豪が予選から好記録を連発し4分30秒を切ることが決勝進出の条件となった。決勝でも積極的なレースとなったがト部が2位とし、谷萩 史歩（八王子3）も自己新をマークし5位に入った。また、予選で健闘し4分28秒台をマークし決勝進出を果たした1年生の佐藤 みな実（順天）は決勝でも懸命に先輩選手に着いていったが入賞には及ばなかった。

3000mは終盤まで混戦のレースとなった。9分20秒台の記録を持つ強豪がひしめくレースは3分10秒のペースをきっちり重ねラストの直線でも10名ほどが2秒の中にひしめいた。ラストのスピードに勝ったものが6位以内に入賞した結果となった谷萩が9分31秒88で上位4名の神奈川勢に続き5位でゴールした。

・ハードル

100mHでは澤田 イレーネ（都文京1）が準決勝で13秒97という高1歴代5位の好記録をマークし、決勝では2.3mの向かい風に阻まれたものの2位に大差をつけての「ぶっちぎり」の優勝を果たした。昨年の全国中学記録をマークしたときのような鋭いキレのハードリングと走りが戻っており、全国大会での活躍も大いに期待できる。決勝には都大会上位3位までの1年生3人が勝ち進み、田島 梨紗乃（東京）が準決勝で自己記録を14秒62までに伸ばし決勝5位に駆け込んだ。鳴川 亜美（白梅学園）も14秒43まで記録を伸ばしたが決勝では7位と涙をのんだ。

400mHは伊藤 明子（田園調布学園3）の独壇場であった。決勝では唯一1分を切る59秒14で2位に1秒以上の差をつける東京都高校新での優勝だった。前半から伸びやかなストライドで、ハードリングもスムーズで終盤の減速も最小限に抑えられている。58秒台も目の前であることから全国優勝もほぼ間違いないだろう。

・競歩

ここ数年インターハイに出場していないこの種目。特に5000mに距離が伸びてからは初のインターハイ選手が誕生した。都高島2年の加藤 泉美が猛暑の中、25分46秒93で3位となりインターハイ出場権を勝ち取った。中盤一度トップに立つ積極性はこの結果を生んだといえる。この健闘は大いに称えられることだろう。

・リレー

400mRでは東京と八王子が決勝に進んだ。しかし、東京はエース高森をケガで欠いていた。しかし、昨年もこの大会に1年生ながらアンカーを務め優勝した武田 夏子を1走に配しバトンをつなげた結果、46秒71で2位とした。八王子も林をアンカーに配し47秒39で3位とした。

1600mRでも八王子と東京が3分48秒台の各組1着で、白梅学園が3分50秒台のプラスで3チームが決勝にコマを進めた。迎えた決勝では東京がエース北村を1走に置き、相洋高校の逃げ切りに対応した結果最後まで接戦を繰り広げ、東京都高校記録に僅かと迫る3分43秒67で2位とした。八王子もチーム記録を大幅に更新する3分46秒93で4位とした。

・跳躍

走高跳では都大会優勝の伊藤 明子が欠場したことから苦戦となった。6位が1m64と決して高いレベルではなかったが都勢選手はだれもそれを越えることができなかった。この種目でインターハイ出場はできなかった。

走幅跳も苦戦を強いられた。トップ8には5m53が必要だったが、これを越えたのは鈴木 利佳（駒大高3）で、7番目で迎えた後半の4回目に5m60を跳び5位としたのが精いっぱいだった。しかし、6位・7位とはわずか1cm差であっただけに薄氷を踏むインターハイ出場権であった。

・投擲

砲丸投は都大会で好記録が続出したが、この大会でそれを維持できていたのは優勝した長沼 瞳（郁文館3）一人であった。優勝記録は13m39で全国でも上位であるが、今後伸びる可能性も多いことから14mを越えることも難しくはないだろう。坂本 早映（戸板女）も1年生ながら4位としてインターハイ出場を果たした。5位には13m23の記録を持つ晴山 江梨花（東京3）が苦戦しながら昨年に引き続き出場を決めた。

円盤投では藤森 夏美（都つばさ総合3）が4回目に逆転して43m27で優勝を果たした。だが、この日は安定していなかった中での自己記録更新だった。コンスタントにこのくらいの記録をマークできるなら45mを越えることもできるだろう。

やり投げも都つばさ総合の石井 崇愛（3）が1回目に44m37をマークして逃げ切った。腰痛を抱えながらの力投でつかんだ優勝であり、今大会東京都としては大会初日の優勝で弾みがついた。また、熊木 綾香（都昭和3）は自己記録を更新する41m13で5位に、澤田 珠里（白梅学園2）も6位とし3名が大分インターハイに進んだ。

・混成競技

七種競技は、まさに全国大会であった。おそらく今大会上位3名がそのままインターハイでの優勝争いを演じるだろう。優勝した伊藤 明子は走高跳で1m75の自己ベストを跳躍し一気に波に乗った。幅跳びでも5m63をマークして従来の自己記録である東京都高校記録を上回る5177点で連覇した。インターハイの連覇も本人のコンディション次第といったところ。3位には、まだ本調子でない澤田 珠里が入ったが昨年度のインターハイ準優勝者なだけにこれから上向くことだろう。また、1年生ながら4682点を挙げた高橋 このか（白梅学園）も高跳びで1m63をコンスタントに跳べるようになり、今後ハードルで成長すれば昨年の澤田に続き1年生で入賞することも難しくないだろう。

・総合

男子同様、昨年優勝の東京が相洋に僅かに及ばず2位とした。800mでの1・2位で高得点を稼いだが、高森の欠場や投擲で思いのほか点数が挙げられなかったことから連覇はできなかった。白梅学園も故障者が相次いだ都大会同様苦戦し3位に留まった。八王子はリレー・短距離・谷萩の長距離で加点していき総合7位とした。

大分インターハイにむけて

万全のコンディションでインターハイを戦いましょう。自分の力を最大限に発揮できる準備をしっかりと整え全国の仲間たちと力を比べましょう。頑張ろう！東京